さいたま市障害者社会参加推進センターだより

ぷらネット

第4号

写真　（左）屋上から長～い梯子で救出　（右上）３階の窓からプラスチックのボートで　（右下）地上についてホッ

助け出された障害のある人たち

八都県市合同防災訓練

まだ暑さの残る九月一日、南区の荒川彩湖公園で、恒例の八都県市合同の防災訓練が行われました。今年は障害者団体が繰り返してきた「障害のある人たちを実質的な体験者として参加させて欲しい」という要望に応えていただき意義のある訓練になりました。

仮設のビルの屋上からはしご車で視覚障害の方が、三階の窓から車椅子の方がロープで、崩壊した建物の中から救助犬にと、三人の方が救助されました。

怖かったり怖くなかったりいろいろでしたが、こうした体験の積み重ねが救助する側にもされる側にも生かされていくことを願っています。

座談会

事業委員会を立ちあげて

模索しながら進む「社会参加推進事業」

昨年度の課題を受けて、より効果的な方法をと考えてスタートさせた事業委員会でしたが、抱えている各会の事情で委員の選出の仕方も取り組みの時期もひとつにはなり切れていなかったと感じました。

それでも各事業は動き出しました。どうしてこんなやり方をするのかという不協和音も聞こえてくる中で、各会の取り組みの事情をお聞きしようというところから、話し合いが始まりました。

事業委員として思ったこと

傳田　まずお聞きしたいのは、各会の事業委員として、どのように企画を立てられたかということなんですが。

司会の傳田さん

阿久津　育成会のほうは、今回は事業委員で動くといわれたのですが、大体のことは引継ぎのノートを見ればわかるので。ただ企画を立てるのが先で、あとから予算の話が出てきたので少し違っていました。

新井　私はですね、企画書と予算書が出来上がった段階で、係わりました。バスでいうなら、後部座席で景色を楽しんでいたのに、急に運転席に座らせられた感じです。でも、何もそんなに気負わないで、初心者マークをつけてやってみようと思っています。

傳田　事業委員が企画を考えるというのではないのですか。

新井　企画に係わった会長に聞きましたら、企画は、精神障害者が社会参加を目指し生きていける環境を作るために、家族の気持ちの理解を求めて、一般の人にわかっていただきたいという気持ちを込めて立案したということです。

松岡　私は、自分たちの頭の上のハエも追えないのに、他の障害者の中に入っていって、意見を言えるのか不安だった。他の団体に入ってかえって混乱を招くのではないかと思ったんですよ。企画については、私は入退院を繰り返していたので、今年はみんなで話し合って決めました。予算については事務局といろいろ話をしました。なんで事業の中から、アシスタント費を出さないといけないのか、そのあたりは市にお願いできないのかという意見がありました。

傳田　今、松岡さんのことばが

出席者（発言順）
- **阿久津奉子さん**（さいたま市手をつなぐ育成会）
- **新井加代子さん**（さいたま市精神障害者家族会連絡会）
- **松岡　英嘉さん**（日本オストミー協会さいたま市支部）
- **長根　清平さん**（さいたま市視覚障害者協会）

司　会
- **傳田ひろみさん**（OMIYAばりあフリー研究会）

キーワードかと思ったんですが、他の障害がわかるかと思ったということですが、そのことってすごく大きいと思います。不安かも知れないけど、事業委員会は他の障害を知る糸口になるんじゃないかと思うんです。

長根　企画の段階で、当日のお手伝いはもっと必要ですかと聞かれたんですが、全然団体のことをわかってない人にこちらの思うように動いてもらえるのかなと思いました。

で、私は正直に、今日話し合いに来てくれた方に手伝っていただきたいと言いました。あとは、よく知っている人にお願いしたほうがいいと思うんです。他の障害について、知る必要はあるんですが、お互いにわからない部分はあると思います。特にうちのように視覚障害者向きの企画については、感覚がわからない方々に入っていただくのはどうかなと思いました。

傳田　うちは小さい団体ですから、みんなに話しながらです。去年の場合（コンペだったので）絶対通したいという気持ちが強いんですよね。企画を立てた人が会議に出たので、あまり他の企画は聞いてないというか、蹴落とそうという気持ちが強くなってしまいました。そんなことを考えると、逆に企画を立てた人じゃない人間が事業委員になったほうがいいのかもしれないですね。

他の障害の実行委員会に出てどうでした？

松岡　一つ不思議に思ったんですが、なんで、同じことをやっているのに、家族教室と生活訓練の予算が違うんだろうと感じました。そこのところがちょっと腑に落ちなかった。

長根　資料をきちんとしておかなくてはと思いました。

阿久津　知らないところに参加したいということで、実行委員会に参加しました。わからないなりに参加してみようと、思って参加したんです。

傳田　皆さんの企画を見ていると協議会の内部、自分たちの団体のためにやるみたいなところがあると思いますが一般の方たちに理解を広げていくという目的があるんですよね。生活訓練と家族教室という区別が少しおかしいかもしれないとかいろんな矛盾点が出てきたんですが、事業の目的というのは、皆さん理解していると思います。

左、阿久津さん　　右、新井さん

障害への理解とは

傳田　ところで、中途障害者と生まれつきの障害者の意識的なギャップというか、障害をどう捉えているのか。たぶんすごく違うんじゃないかと思いますがどうでしょう。

松岡　うちの団体は、結構六十代になってから初めて障害者になる人が多いんですよ。変に考えてしまうんですよ。なかなか自分が障害者であることを認められないというか、認めたくないという感じがあるんです。

長根　私の場合本当に先天性ですから、自分では何の抵抗もないんです。そういうもんだと思っちゃってるでしょ。比較仕様が無いんです。最初からあきらめているので。

松岡　チラシ作るときも問題が起こったんですよ。私は思い

切って人工肛門、人工膀胱って書いたらっていうと、そういう会には来たくないっていう人がいるんです。不安も大きいんです。人に気づかれないかという不安がある。

傳田　障害をもった者が悪いんでしょうか。もっと堂々としていいんではないでしょうか？

松岡　まあ、楽しく過ごしている人もたくさんいらっしゃいますが。ただ何割かはそんな人がいるんです。

阿久津　知的の場合は、親がどこで転換するかです。どうしてうちにうまれちゃったんだろう、どうしてうちだけこういう目に遭うんだろうっていつまでも思っていないでね。何かをしなくちゃという転換の速さがその子の成長の速さを決めるんです。

一緒に歩いていくしかしょうがないんですよね。いろいろな方を巻き込んで私は助けられてきました。

左、松岡さん　　右、長根さん

傳田　私自身四歳の時小児麻痺で、ほとんど生まれつき。でも本当に親はどこに行くのでも連れ歩きました。私がちょっと歩けるようになったときには、ちょっと変な格好して、歩くわけです。そうすると振り返ってジーと見ている人がいるんですよ。うちの親が、にらんだ人にはにらみ返してやりなさいと言ったんです（笑い）。そういう育てられ方をしたんです。絶対に隠さないっていうことを教えてくれたのを感謝してます。

新井　精神の福祉は非常に遅れています。それは家族自身が持っている偏見っていうか。私自身も、精神に対する偏見をものすごく持っていたんです。うちの娘は宗教のマインドコントロールで、それから離したら一週間でだめになりました。私の体調もガタガタになりました。自分自身が小さいときから持っていた精神の病に対する偏見がありましたので、天国から地獄です。苦しみました。私も子どもが一人でしたら、つぶれていたかもしれないです。その子のために他の三人の子どもを、巻き添えにすることはできないと思いました。私がしっかりしなくてはいけないと。私は音楽をやっているんですが、その音楽の演奏会とか、その娘をどこへでも連れて行きました。こんなに変わってしまった娘を、開き直って。私自身家族会を通して学んだのは、投薬拒否や当事者の社会からの逃避は、病状回復の壁となるということです。

傳田　今車椅子体験とか、アイマスク体験とか、流行っているじゃないですか。その場で車椅子乗ったり、アイマスクつけたり、怖いじゃないですか。長根さんは怖くないですよね。車椅子だってそうです、ずーと乗っているんですから。意識が違うのに体験したって、それで福祉教育っていってもちょっとね。

新井　知的の会のお母さんは皆さん明るいですよね。精神の障害の親は非常にブルーです。

阿久津　知的障害のことがよくわかってくると、そうでないことがわかります。一人一人みんな違います。落ち込む人もいるんですよ。

傳田　みなさん、ありがとうございました。

平成17年度　社会参加推進センター開催事業　一覧

事　業　名	開催日／場所	対象／定員	テ ー マ ・ 内 容　等
障害者110番事業	通年 平日9：00から16：00		月・木が身体、火・金が知的、水曜が精神についての相談を受けています。
相談員強化事業 第1回相談員 全体研修	6月14日㈫終了 大宮ふれあい福祉センター	相談員等 60名	清水圭子氏（元東京都目黒区福祉事務所ケースワーカー　前全日本手をつなぐ育成会中央相談室長）を講師に招き、「新しい福祉の時代にふさわしい相談員の役割」というテーマで講演会を行ないました。
家族教室開催事業 （精神）	9月25日㈰終了 浦和ふれあい館	市内在住、 又は在勤の方 150名	「精神障害者の社会参加を目指して」というテーマで、精神保健福祉に関する講演会と、市内の作業所に通うメンバーから就労体験やこれからの希望についてのお話を聞きました。
家族教室開催事業 （知的）	10月6日㈭終了 埼玉県障害者交流センター	市内在住、 又は在勤の方 100名	全日本育成会権利擁護委員の野沢和弘氏を講師に招き、「障害者虐待防止法制定にむけて」というテーマで講演会を行ないました。
生活訓練開催事業 （身体）	10月15日㈯終了 宮原コミュニティセンター	市内在住、 又は在勤の方 100名	「わたしたちのまちのバリアフリー」というテーマで、高橋儀平氏（東洋大学工学部建築学科教授　さいたま市福祉のまちづくり推進協議会会長）の基調講演と、シンポジウムを行ないました。
生活訓練開催事業 （身体）	10月25日㈫ 下落合コミュニティセンター	市内在住、 又は在勤の方 70名	喉頭を摘出した音声機能障害者が、代用気管を使った発声訓練で、第二の声を取り戻すための発声法の講義と、公開講習会を行ないます。
生活訓練開催事業 （身体）	11月20日㈰ 桜木公民館	市内在住、 又は在勤の方 100名	オストメイト（人工肛門・人口膀胱造設者）のために、「手術後遺症とその対処法」というテーマでの専門医の講演と、WOC看護認定看護師によるケアについての講義を行ないます。
家族教室開催事業 （身体）	12月4日、11日、18日と1月8日、14日の全5回 生涯学習総合センター	難聴者と その家族 20名	重度の難聴者、特に中途失聴者がいらっしゃる家庭では、筆談の場面が多く見受けられますが、筆談はなかなか大変です。そこで、家族間の円満なコミュニケーションを図るため、まず初級程度の手話から始めてみませんか？
生活訓練開催事業 （身体）	12月11日㈰ 与野本町コミュニティセンター	市内在住、 又は在勤の方 90名	視覚障害者のための、音声装置によるパソコン、拡大読書器、などの日常生活用具を開発している業者を招いて、説明を聞き、実際に体験していただきます。
相談員活動強化事業 第1回知的障害者 相談員研修	12月	詳細未定	ケーススタディを行なう予定。
相談員強化事業 第1回身体障害者 相談員研修	平成18年1月	詳細未定	詳細未定
生活訓練開催事業 （身体）	平成18年1月31日㈫ 場所は未定	詳細未定	「共に街を歩こう～障害種別で分けないために～」をテーマに障害者・健常者が一緒に街歩きをし、グループ討議を行ないます。
家族教室開催事業 （身体）	平成18年2月4日㈯ 場所は未定	詳細未定	福祉に詳しい弁護士を招いて、知って得する法律知識についてお話を聞きます。また三障害の福祉サービスの違いについて話し合います。
相談員活動強化事業 第2回相談員 全体研修	平成18年2月	詳細未定	詳細未定

＊（注）上記の掲載内容は10月現在の予定なので変更になる可能性もあります。

平成17年度第１回相談員全体研修

暮らしをまもる
―相談員の役割と課題―

今年は相談員の改選期にあたり、新任の相談員向けに相談員制度の成り立ちや課題などにも触れていただけるように、元東京都目黒区福祉事務所ケースワーカー清水圭子さんを講師にお迎えし、体験に基づいた温かいお話を伺うことができました。

お話はまず、二分脊椎という先天性の重度の身体障害を持ったご自分のお孫さんのことから始まりました。

今、六年生のお孫さんが二年生のとき『五体不満足』という本を出された乙武さんに手紙を出したいと言ったそうです。返事が来てからお孫さんが書いた手紙を見せてもらったそうですが、そこには「乙武さん、私は自分の体が恥ずかしいです。乙武さんはどうですか」とたった三行書いてあった。「障害を持つということは、本当に深い悲しみを与えるものなんだな」と感じたということでした。

講師　清水圭子さん

目黒区福祉事務所のケースワーカーを36年、全日本手をつなぐ育成会の中央相談室長を８年、計44年間福祉関係の相談業務に関わってきた。

以下、熱のこもったお話の中からポイントを抜粋してお伝えします。

相談員制度の成立

身体障害者相談員制度は一九六七年（昭和四十二年）に成立し、翌六八年に知的障害者の制度が始まりました。精神障害の分野では、専門職による精神保健福祉相談員制度が設置されています。

制度成立の背景には、①公的な相談事業の未成熟、福祉制度の利用について情報が届かない。②無理心中、子殺しなど、当時の障害者を取り巻く社会状況に対して、強烈な意識（使命感）を持って発足した。③障害のある人の相談には、同じ町に暮らし、同じ痛みを持った人による相談活動が効果的である。という考え方がありました。

当時の申請機関である福祉事務所は生活保護、老人福祉の業務に追われ、福祉三法（児童・身体・知的）にはほとんど何もできない状態でした。まず、身体障害者の団体の方が国に訴えられて相談員制度ができました。翌年やはり知的（精神薄弱者）障害の団体が働きかけて実現した制度なのです。当時相談員になられた方々は、自分の住む地域からは絶対に不幸な事件を起こしたくないと思われたに違いないと思っております。

相談員制度の現況

平成十三年度に日本身体障害者団体連合会が手がけた実態調査によると、以下のようになっています。

	身体障害者相談員 12,167人	知的障害者相談員 4,807人
(1)配置数（全国）		
(2)相談員の年齢等 年　　齢（平均） 男 女 比 相談員歴	66歳（60～79歳62%） 男性－81%　女性－19% 0～4年　45% 5～9年　26%	60歳（同レベル46%） 男性－40%　女性－60% 0～4年　43% 5～9年　27%
(3)相談業務の状況 相談件数（平均） 行事参加回数 相談は連絡待ち 相談日設定 戸別訪問の実施 相談記録の提出	 19件 17.9回 77% 42% 37% 79%	 16.3件 17.3回 78% 31% 30% 74%

相談員制度の評価と課題

先に掲げた一覧を見て、相談員制度が危ないと感じました。平成十年に国の制度から地方自治体の制度に切り替わった現在、この制度の維持、発展というのは設置自治体の胸先三寸なのです。自治体はどこで評価をするかといえば、それぞれの団体が役割を果たしているかということ、そして相談件数と記録、これに他なりません。

この調査の結果、相談員個々の業務についての理解や取り組み姿勢には温度差があり個人的な差が激しいということが分かります。地域の強力な相談機関である民生・児童委員との連携、障害者相談員連絡協議会の設立強化を図ることも求められているのではないでしょうか。

暮らしをまもる相談活動

こうした状況を受けてまず、何をしなければいけないかを考えてみましょう。

地域に暮らす障害者ご本人、家族はもちろん、関係機関とか地域住民にも「私は相談員ですよ」ということを伝えて、顔が見えるようにすることです。

それから、いま、障害別の相談活動をなさっていると思うのですが、障害別の相談にこだわっていいのだろうかと思います。地域においては、初期相談は誰でも受けられるようにしないと相談者は逃げてしまいます。やっと決心して相談したのに、それはこちらではないのでと言われたら、多分そこで止めてしまいます。

民生委員さんは障害者の相談は実際は怖いと思っていらっしゃるんです。何か言うと「差別」と言われてしまうのではないかと不安にも思っていらっしゃる。でも民生委員さんも「障害部会」というのを持っていらして研究はしていらっしゃる。そこの連携協力というのは大事ではないかと思います。

相談員個々の点としてのサポートではなく面としてのサポート、障害者だけのサポートではなく家族の支援も必要であるということがあります。

今思うことは、相談員制度が発足してずいぶん経ちますが、どれだけ事態は改善されたでしょうか。制度発足の先輩たちの思いを原点に、またここで踏ん張る時期にあるのではないかと思います。

二年目に入って体制が改善された障害者一一〇番

「障害者一一〇番事業」は五月で一周年を迎えました。

この間、相談者の緊急の悩みにどう応えられるか、手探りの一年間だったように思います。

研修会を兼ねた担当者の集まりで検討の結果「相談員の専門性を高め、相談内容に責任が持てる」よう、七月から体制の改善を図りました。

それは①一一〇番を担当する相談員を十人程度に絞り、②担当する曜日を原則として固定するということです。

これにより、相談内容をきちんと引継ぎ、相談者の要請にしっかりと応えていける「障害者一一〇番」にしようと、担当者一同がんばっております。（平林）

リレートーク
わたしはわたし

いくつかのことばに支えられて

ラウンジ南浦和　Ｙ・Ｙ

統合失調症を患って二十数年になります。当事者の声を通し、この病への理解が少しでも得られればと思いペンをとりました。発病はある事をきっかけに毎晩殺される夢を見るようになり、精神科を受診しました。帰国子女である私にとって、絶えず緊張と競争を強いられる日本の環境に溶け込めなかったことが一つの要因だったように思います。

この病の急性期の混乱と苦しみは大変なもので、その後も生き辛さを残します。医学的に体の病と変わらないのに「心の病」の呼称が実際を曖昧にしています。「甘えている」周囲の声に逃げ場を失い追い詰められました。

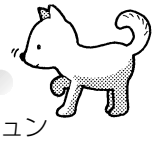
そんな私をいくつかの言葉が支えてくれました。主治医だったT先生は「患者に望む最も大切なことは何ですか」との私の問いに、即座にきっぱりと「生きていくことです」と答えました。窮状を書き送ったクアラルンプール日本人学校の恩師は、「どんなに孤独な時でも必ず一人は貴方のことを大切に思っています」との返事をくれました。

苦しい毎日を飼犬が支えてくれたり、季節の花々に慰められたり、海辺で寄せては返す波をぼんやり眺めたり、現代人が求めてやまない何かを、実は私達障害者が先取りしているとも思えます。各地を旅する中で、家康や竜馬、子規ら先人の生き方に勇気づけられました。ディスカバージャパン、日本再発見でした。旅や読書を通し私が感じた日本人の原点は「互助」という言葉に集約されるものでした。

病の経験を通じ私が社会に望むことは「互いに助け合う」精神を今一度思い起こすことです。異なることを排除しない世界を願います。私達をがんじがらめにする無意味な競争から解き放たれ、優しく簡素な社会を目指し、共に生きてまいりましょう。

Ｙ．Ｙさんプロフィール

エジプトのカイロで生まれる。父の仕事の関係で、子供の頃より長く海外生活を経験。思春期に統合失調症を発症する。日本文化を知りたくて、５年ほど前より茶道を始めた。



ジュン

事務局だより

先日、新宿から埼京線に乗ったときのことです。夕方だったので、電車はとても混みあっていました。私はちょうどシルバーシートの前に立ちました。隣には、明らかに具合の悪そうな若い女性が今にも倒れそうな感じで立っていました。シートには、私と同じ子育て世代の女性二人組みが座っていて、楽しそうに話をしたり、携帯電話をかけたりしていました。途中で一人が下車し、隣の女性は私に会釈して座りました。そのとき私は愕然としました。その女性は首から「障害者手帳」を提げ、そのケースの中には小さなピンク色の薬が入っていたのです。

十一月に障害者週間記念事業を開催します。一般の市民の方にも、たくさんご参加いただければと思っています。（U）

発行　さいたま市障害者社会参加推進センター
〒三三三〇-〇八〇一
さいたま市大宮区土手町一-二一三-一
大宮ふれあい福祉センター４F
ＴＥＬ／ＦＡＸ　〇四八-六五三-七二七一
発行人　望月　武
編集人　浅輪　田鶴子